

柳原義達と 川村家三代展

紫朗

日本画



兼章

彫刻



信雄

油彩画

直子

絵画

11:00-16:00 月曜日休館

「柳原義達の世界」(彫刻) + 「川村家三代展」

本館入館料 一般1000円 学生 500円

2025. 6.7 (土) - 7.13 (日)

本館 東京都江戸川区中葛西6-7-12
TEL. 03-3869-1992 FAX. 03-3688-5955
HP. <http://www.bbcc.co.jp/museum/>
<https://www.facebook.com/SEKIGUCHImuseum/>
https://www.instagram.com/sekiguchi_museum/

東京メトロ東西線 「葛西駅」
中央改札を出て南へ徒歩10分

協賛 株式会社 共立メンテナンス
ウエルシア薬局 株式会社
株式会社 富洋
株式会社 関口雄三建築設計事務所
協力 NPO法人ふるさと東京を考える実行委員会

関口美術館

SEKIGUCHI MUSEUM



柳原義達

Yoshitatsu Yanagihara

と

鳩

pigeon



と
川村家三代展

Three generations of the Kawamura family

2025. 6.7 (土) - 7.13 (日)

11:00-16:00 月曜日休館

本館入館料 一般1000円 学生 500円

戦後日本を代表する彫刻家・柳原義達による鳩の彫刻と共に、書生として柳原の元で学んだ川村兼章の彫刻、兼章の祖父で画家・川村信雄、父の日本画家・川村紫朗、叔母で絵画・インスタレーションで活躍した直子の川村家3代に渡る4人の作品を展示致します。

柳原義達(1910-2004)は、孤独と戦いながら彫刻と向き合い続け、ヨーロッパの伝統的な彫刻から抜け出し、独自の表現を見出しました。柳原は仕事のなかに生を求め、生きている不思議さを刻み込もうとしました。【道標】に関して、「画家があまり表現出来ない、またあまりみる、あまり考えることもない、自然に内在する量の移動、量と量のひしめき、そんな自然のもつ不思議な法則を縦や横に組み合わせる。これだけは彫刻家でなければ出来ない唯一の喜びである」と柳原は述べています。分身のようにひとつひとつ生み出した道標は今も私たちの道しるべとなっています。

川村信雄(1892-1968)は東京の開成中学を病気で中退したのち、アカデミックな画風を主流とした太平洋画会研究所に学びました。20歳の時、同世代の岸田劉生や川上涼花らと共に「ヒュウザン会」の創立(1912)に加わり、後期印象派の影響を受けた革新的な画風に接しました。また、紫紅会として展覧会を開催、この仲間には鈴木信太郎、川上涼花、岸田劉生、萬鉄五郎など錚々たる画家たちがおり、その中心的な役割を果たしました。戦後は太平洋美術会の会員となり、理事を歴任、1916年に横浜に移り住み、横浜美術会の設立、また関東大震災後には、大規模な「横浜美術展」を開催して震災後の復興に努め、終生横浜の美術界の発展に力を注ぎました。また1925年には本格的な画塾を設立、戦中、戦後を通じて若い画家や、美大受験生の指導に力を注ぎました。

川村紫朗(1940-)は1960年東京藝術大学日本画科に入学、同大学を卒業。1969・70・74年に日本美術院展入選、1970年にはハマ展(横浜美術協会)会員となり、朝日新聞社賞、読売新聞社賞を受賞、現在も同会で活動しています。横浜から逗子に転居し、空き地に咲く彼岸花を見た時から60年、現在も彼岸花に惹きつけられ、描き続けています。

川村直子(1932-)は視覚をだますような絵画によって1960年代後半より広く知られるようになりました。1969年神奈川県美術展でグランプリを受賞、同年第4回日本芸術祭では優秀賞を受賞、近年は平面作品のみならずインスタレーションへと展開し、小さな鉛の粒子を取り付けた無数のワイヤーを吊るし、鉛で空中に幾何学的に空間の図解を記した作品《無題》(2003)などで注目を集めました。

川村兼章(1969-)は日本大学芸術学部在学中から、戦後のフランス具象彫刻全盛期に留学した柳原義達、土谷武から直接薫陶を受けました。大学院修了後は、柳原先生の家に7年間も住み込むなど、恵まれた環境の中、30歳までは徹底的に具象のモデリングの作品を作り新制作展でも発表を続けてきました。近年は素材の多様性から、鉄と木のハイブリッド彫刻に発展、鉄は、鉄鋼所での端材から何かに見立て形を追求、また、捨てられた櫨の幹と枝の接合部分をあえて生命力と時の流れを存在や気配として感じて取り、作品を制作しています。

関口美術館

SEKIGUCHI MUSEUM